

## 演題10. 岩手医科大学歯学部附属病院歯科ドックのシステムと機能

○稲葉 大輔, 中島 薫, 菅原 教修  
 虫本 栄子, 藤澤 政紀, 大屋 高德  
 杉山 芳樹, 野坂久美子, 福田 容子  
 小豆島正典, 石橋 寛二

岩手医科大学歯学部附属病院歯科ドック委員会

本学歯学部附属病院の歯科ドックは、大学病院の機能と専門性を生かして歯科保健の支援を目指す新しい歯科医療サービスとして1998年7月に開設された。現在、病院長統括のもと臨床各科のドック担当歯科医師を中心に、歯科衛生部、看護部、医学部人間ドック室の協力で運営され、実務の検討を歯科人間ドック委員会が担う体制で進められている。歯科ドックの目的は、多項目検査による口腔領域疾患の総合スクリーニングを通じて個人の健康管理を支援することである。さらに、委員会では診査結果から得られるデータを日常診療にフィードバックすることも重要な機能ととらえ、系統的なデータの蓄積を試みてきた。今回は、委員会を中心に検討構築されてきた本学歯科ドックのシステムを紹介するとともに、受診者の口腔保健状況をデータベースの集計結果に基づいて報告した。1998年7月の開設から1年間の利用者は累計で100名（男性42名、女性58名）となり、年齢範囲は25～77歳、内訳では50代と60代が全体の63%を占めた。スクリーニングの結果、要精密検査と要処置の該当率は、検査の項目別にX線診査：15%、顔面・粘膜・顎関節関連：20%、保存・補綴関連：73%、歯周疾患：49%であった。これに要経過観察および要予防管理の該当を加えると、全体では85%の受診者には何らかの異常や徴候が認められる状況が明らかとなった。このような多項目診査の結果、重症化以前に適切な措置やアドバイスが可能となり、専門各科が連携した総合スクリーニングは個人の歯科的健康管理に極めて有用であることが再確認された。今後の課題として、歯科分野における検査システムの確立によるスクリーニングの効率化が望まれる。

## 演題11. 口腔インプラント室における Osseointegrated Implant の治療例

○伊藤 創造, 梶村 幸市, 塩山 司  
 石橋 寛二, 横田 光正, 石川 義人  
 宮手 浩樹, 工藤 啓吾

岩手医科大学歯学部附属病院口腔インプラント室

近年、生体材料の開発が活発に行われ、臨床に積極的に導入されている。口腔領域においてはインプラントを欠損部に利用し咀嚼機能ならびに顎口腔系の機能を回復するなど治療法も多様化している。岩手医科大学歯学部附属病院も平成6年から口腔インプラント室を設置し顎口腔系の機能回復を目的に治療を行っている。今回、オッセオインテグレートッドインプラントを下顎欠損部に用いて咀嚼機能の回復を行った3症例を紹介するとともに、患者アンケートによる咀嚼機能評価を行った。

その結果、3症例とも埋入したフィクスチャーは全てオッセオインテグレーションを獲得し、上部構造装着後も良好に経過している。また、アンケートからインプラント治療を行う前は、摂取不可能な食品や困難だが食べられる食品が数多く含まれていたが、インプラント治療後は3症例とも全ての食品が摂取可能になっている。インプラント治療により普通の欠損補綴治療では摂取不可能な食品が食べられる様になっている。インプラント治療は、30年以上の長期症例報告もあり予知性の高い治療として確立された治療法の一つであると考えられる。しかし、的確な適応症の判断や確実な埋入技術、正確な技工操作、患者サイドの十分な理解、経済的な負担、治療の長期化等の条件が全てクリアされなければならぬ治療法であるのも事実である。歯列欠損症例の患者に、昔のように何でも食べておいしく食事がしたいというニーズがある以上、そのニーズに応えられる医療を提供するのも我々の務めと考える。